＜応募方法＞

郵送の場合は応募用紙とあわせて下記応募先の宛先へ、電子メールの場合は応募用紙の項目を記載し、下記応募先の電子メールアドレスへお送りください。学校で取りまとめて応募することも可能です。なお、作品中に他人が著作権をもつ著作物等が含まれる場合には、許諾を得た著作物等とその著作権者等の連絡先のリストも添付してください。

＜応募先＞

郵送

700-0022 岡山県岡山市北区岩田町2-12F-ADIビル3階北 株式会社ログーデザイン内「親へのエール論文審査実施事務局」宛
(応募の際は「子から親へのエール論文在中」と朱書きのこと)

電子メール

diversity@logoo.design

＜審査方法、各賞授与＞

岡山県内の大学関係者で組織する審査委員会で、厳正に審査を行います。高校生の部・大学生の部それぞれで入選作品を選出し、その中から「岡山県知事賞」「岡山経済同友会代表幹事賞」「岡山大学長賞」を授与します。
また、積極的に取り組んでいただいた学校には「ダイバーシティ教育推進学校賞」を授与します。

＜入選発表＞

2025年12月中旬に本人へ入選・入賞の連絡をいたします。
なお、入選されなかった方への連絡はいたしません。
2026年1月26日に岡山県庁で表彰式を行います。
受賞された方はご出席をお願いします。

＜作品発表＞

作品集として冊子を作成し高校や大学、関係者などに配布するとともに、当実行委員会のホームページに掲載いたします。

必須記載事項

応募する論文には、下記内容を全て記載してください。

- **家庭と仕事のはざまで起きている具体的なエピソード**
- **親へのエールとなるメッセージ**
- **自身の意識や行動の変容、ならびに提言**

応募前には必ず募集要項をご確認ください

ホームページに詳細な募集要項を掲載しておりますので、必ず内容をご確認ください。

郵送の際は下記応募欄に必要事項をご記入いただき、論文と同封の上ご応募ください。

URL https://logoo.design/yell

応募用紙

1. 個人応募記入欄　（個人でご応募いただく場合はこちらをご記入ください）

氏名	ふりがな		
住所	〒　　ー		
電話番号		メールアドレス	
学校名		学年	年
論文内容について	応募論文には、必須記載事項が全て記載されていますか？(確認の上、チェックを入れてください) ☐ 記載されていることを確認しました。		

2. 学校取りまとめ応募記入欄　（学校で取りまとめてご応募いただく場合はこちらをご記入ください）

学校名		担当教員名	ふりがな	
学校住所	〒　　ー			
担当教員 電話番号		担当教員 メールアドレス		
1　応募生徒名	ふりがな		学年	年
2　応募生徒名	ふりがな		学年	年
3　応募生徒名	ふりがな		学年	年
論文内容について	応募論文には、必須記載事項が全て記載されていますか？(確認の上、チェックを入れてください) ☐ 記載されていることを確認しました。			

子から親へのエール論文コンクール2025

仕事や家庭で
頑張っている親へ
今だから言える
ありがとう。

普段はなかなか伝えることができない
親への感謝の気持ちを伝える
論文を募集します。

2025 10/31 締切
当日消印有効

募集期間 2025年6月16日（月）～10月31日（金）

「仕事や家庭で頑張っている親へ今だから言えるありがとう」をテーマとし、仕事や家庭で頑張っている親に対して、泣いたり、笑ったりしたエピソードや親へのエールとなるメッセージを添えて、働き方の多様性など社会におけるダイバーシティの在り方を主に家庭の視点から考える論文を募集します。家庭と仕事のはざまで起きている具体的なエピソードと親へのエールとなるメッセージに加えて、自身の意識や行動の変容、ならびに提言を交え、作品をお寄せください。

対象（応募資格）

県内外の高校生・大学生
（専修学校・各種学校生を含む）

募集作品の規格等

書式自由、文字数 1,600 字程度
冒頭に題名（作品タイトル）と氏名を明記してください。

賞の種類と副賞

岡山県知事賞
岡山経済同友会代表幹事賞
岡山大学長賞

- 副賞 -
図書券10,000円

問い合わせ：ダイバーシティ推進実行委員会おかやま事務局
（株式会社ログーデザイン内）
祝日を除く 月曜日～金曜日 10:00～17:00 TEL：086-235-6010
diversity@logoo.design　www.logoo.design/diversity

主催者：ダイバーシティ推進実行委員会おかやま（岡山県、一般社団法人岡山経済同友会、国立大学法人岡山大学）　後援：岡山県教育委員会、岡山県私学協会

過去の受賞作品紹介

その他の受賞作品については
ホームページに掲載しております
スマホからのアクセスはQRコードをご利用ください
https://logoo.design/diversity

2023年度
高校生部門
岡山経済同友会
代表幹事賞
受 賞

父へのエール ～私の言葉で社会を変える～

おかやま山陽高等学校３年 橘 里香サニヤ

幼い頃、いじめられて泣いている私に「前向きにね」と頭をなでながら何度も励ましてくれた父。しかし、私はいじめられた理由を父に言うことはできませんでした。

私はインドネシア人の父と日本人の母の間に生まれたハーフです。日本で生まれ育ち、日本語しか話せません。幼い頃から、私の名前を見ただけで「日本語が上手だ」と言って国籍を尋ねてくる人、外国人が事件を起こしたとテレビや新聞で報道されると「やっぱり外国人は犯罪を起こす」と軽蔑し暴言を吐く人など、私は「普通の」日本人として受け入れてもらえない日々に苦しみました。そして何よりもそれを家族に打ち明けることができず、泣くことしかできない自分自身を情けなく思っていました。

そんな環境を変えたかった私は家族の理解と協力のもと、高校入学を機に鳥取県から岡山県に家族皆で引越し、幼い頃からの夢であったパティシエになるために製菓科のある高校へ進学しました。高校ではあの辛かった日々が嘘のように、同じ目標を持った仲間に囲まれ、楽しく高校生活を送ることができていました。

しかし高校１年の冬、岡山市の建設会社で起きた外国人技能実習生への暴行事件が報道された時、父は24年前に技能実習生として来日して以来、日本で暴言や賃金未払いなど不当な扱いを受け続けていることを初めて家族に打ち明けたのです。日本で働けば家族を楽にさせてあげられると信じ、どんなに辛く大変な仕事でも弱音を吐かずに仕事に打ち込んできた父。初めて聞く日本語と慣れない日本文化に戸惑いながらも言葉の勉強を続け、何不自由なく日本語を話すことができるようになったにもかかわらず、父の努力を認めようとせず、漢字が上手く書けないと分かれば「うちの会社で仕事はできない」と言われたり、一ヵ月で仕事を全て覚えられなければすぐに辞めることを採用条件に出されたりと、外国人という理由で正社員として働くことは難しいと何度も言われたそうです。また、仕事の説明や休憩時間を故意に伝えられなかったり、必要な残業をしても「勝手にしているから」と残業代が支払われない理不尽さを経験してきました。そして昨年11月、外国人という理由で父は解雇され、長期間仕事が決まらない我が家は貯金を切り崩しながらの生活で、先が見えず不安で心が暗く沈み、あれだけ不平不満を言わず前向きに生きようと言っていた父でさえも笑顔を忘れかけていたのです。

こんな納得のいかない状況を変えたいと思った私は、今度は私が父を励ます番だと考え、私のできることを探しました。アルバイト代は全て家庭に入れるだけでなく、私の言葉でこの社会を少しでも変えたいと考えるようになった私は、高校で始めた弁論でこの問題を取り上げ、一人でも多くの人に外国人労働者の抱える問題を知ってもらい、私の言葉で社会を変えてみせると心に決めたのです。

今年４月、やっと仕事が決まった父は、私が家で弁論の練習をしていると、「サニヤが頑張ってるんだから、お父さんも仕事を頑張らないとな」と笑顔で言ってくれるようになりました。その父の姿に、私は将来日本で暮らす外国人の支えとなりたいと思うようになりました。言葉が分からず一人で不安な日々を過ごす人、正しく評価されず悔しい思いをする人など、希望を抱いて来日した人が絶望的になりかけている状況を救うために、私は心の支えとなりたいのです。不当な扱いをされる社会ではなく、公平な評価が受けられるように、そして外国人労働者達の現状を知ってもらうために、私は声を上げ続けていきたいのです。

今もなお非正規雇用で働く父は外国人労働者という理由で不当な扱いが続き、公平な評価を受けることができていません。日本で安心して笑顔で生活できるように、そしてどこの国の人でも安心して日本で仕事ができる社会に変えるために、私はこれからも父へのエールとして弁論を続け、私の言葉で日本を温かい社会に変えていきます。

2015年度
大学生部門
岡山大学長賞
受 賞

ごめんね。

就実大学３年 磯島萌子

「ごめんね。」仕事から帰ってきた母の第一声は「ただいま」ではなく、この言葉だった。私の母は、私が小学２年生の時から働き始めた。「もうお姉さんだから大丈夫だね。」と言われ、お姉さんという母の言葉に、当時は胸が高鳴ったことを覚えている。しかし、学校から帰っても誰も「おかえり。」と言ってくれない生活に慣れることはなかった。

小学３年生の冬、学校から帰った私は、冷たい部屋で早くあたたまりたいとココアを作ろうとした。しかし、慣れないやかんで手が滑り、お湯が手にかかってしまった。今思えば、小さな火傷だったが当時は周りに頼れる人もおらず、母が帰ってくるまでずっと泣いていた。そして、そんな私の姿を見た母は、「ごめんね、ごめんね。」と私の手を手当てしてくれた。その日から母は、出勤する時も、帰宅する時も、いつも「ごめんね。」と言うようになった。次第に私は、母が働くことを心のどこかで「悪いこと」と思うようになっていった。

母と共に父も、いそがしく働いていた。朝は早く出勤し、夜は遅く帰ってくるため、顔を合わせないこともしばしばあった。しかし、そんな父が働くことを嫌だとは思わず、むしろ“私のお父さんは凄いんだ”と友達にもよく自慢していた。休日もなかなか一緒に遊んではくれなかった父のことを何故嫌いにならなかったのか。それは母がずっと、「お父さんはね、家族みんなのために一生懸命働いてくれているんだよ。お父さんも萌子と遊びたいのを我慢しているよ。」と教えてくれていたからであろう。そんな、親が共働きの家庭で、私は、とにかく一生懸命働く父ばかりに目を向け、感謝をした。

こうして共働きの家庭に慣れてきた中学１年生の夏、遂に母が体調を崩し入院することになった。幸いにも大したことはなく、１週間程の入院であったが、母が入院している間、私は、初めての母代わりをしなければならなくなった。母はいつも、仕事から帰ると休む間もなく夕食の準備をし、洗濯からアイロンがけまで全てを短時間でこなす。辛い顔１つ見せずこなす母を何年も見ていたため、私も簡単に出来るだろう、そう考えていた。しかし、その考えがなんと安易なものだったのか、と母代わり１日目で気付くことになった。部活から帰ると、疲れていてもすぐに夕食の用意、そして食べる前に洗濯物をたたみ、掃除をする。全てを片付けた頃にはヘトヘトで、ご飯を食べる元気すらなかった。私はこの時初めて、母の強さ、凄さが身に染みた。６年間も母の姿を見てきたのに、１度も気付くことが出来なかった。そして同時に、６年間も「ごめんね。」と母に言わせてしまったこと、無意識に母を責め続けたことを悔やんだ。

私は今、大学３年生であり、保育士になりたいという夢を追いかけ勉学に励んでいる。こうして夢を追いかけることが出来ているのも、母と父が仕事と家庭を両立してくれたからである。現代は、共働きの家庭が増え、男女共同参画社会に向けて様々な取組みがされている。しかし、働く“母”の立場にある人は、私の母の様に働く自分を責めている人が多いのではないだろうか。働く男性、父にばかり目を向けられ、凄いとされる現代社会。家事と仕事という２つの責任を背負う母を賞賛する声はまだまだ少ない。

保育園に子どもを預けに来る保護者は、共働きである。その保護者からもまた、「ごめんね。」という言葉をよく聞く。私は保育士になってそんな保護者からの「ごめんね。」をなくし、親子共々が、働くことに誇りをもてるような、保護者支援をしていきたい。

お父さん、お母さん、私は２人の子どもで本当に良かった。今度は私が、「ごめんね。」と言わせてしまったその分が隠れてしまうくらいの「ありがとう。」を伝えます。

※所属・学年は応募当時のものです。